民俗学研究所ニュース
No.145
July, 2024

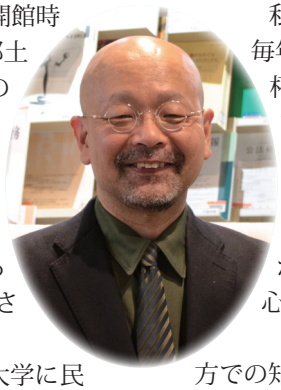
・巻頭言……1
・研究所活動報告……2
・豆手帖㊹ ……3
・夏期開室日等 ……4

成城大学に民研があるということ

成城大学法学部長　川 淳 一

民俗学研究所ニュースの巻頭言をというお話しをいただいて、最初の感想は、「うわ、困った」ということでした。

民俗学研究所の秋季特別展示の内容は、私の「大好物」でありますし、小田厚道路をゆるりと流して、ときどき気晴らしに行く小田原城でも、開館時間に間に合えば、城内にある小田原市郷土文化館の２階の民俗資料室に足を運ぶのが私の常でありますから、興味のあるなしでいえば間違いなく「ある」ではあります。しかし、その学問的位置づけといわれると、「大変申し訳ありません、よくわかりません」としかお答えのしようがありません。この点、勉強不足でごめんなさいと申し上げるほかありません。



ただ、また、別の経験に照らすと、大学に民俗学の研究所があり、そこでの研究成果が大学の流儀に従って公開されて、適切な批判にさらされるということは、大変に意義のあることだと思っています。それはこういうことです。

私は、最初の就職先が教養部解体によって消滅してしまい、「こうなったら、太鼓を叩いて行進でもして憂さ晴らししなきゃやってられない」と思っていた時に、サンバというものに出会ってしまい、コロナ禍前までは毎年必死の練習を重ねては、浅草サンバカーニバルというものに参加しておりました。

浅草サンバカーニバルに参加するサンバチームには、総勢 300 人規模の大きなものがいくつかありますが、それらはどれも大変に本格的なものであります（ちなみに何年か前に学祭に呼ばれてきたチームも有力チームの一つです）。最初はダンスがしたい、太鼓を叩きたい、歌をうたいたいという類の比較的単純な動機でみんな入ってきますが、やっているうちに、何しろやっていることが本格的ですから、表層的な真似事に飽き足らず、サンバなりカーニバルなりの文化的文脈における意味に関心を持つ者も当然出てきます。そうすると、自分でブラジルに行ってみる、行けないけれどブラジルでサンバをやっていたブラジル人から話を聞いてみる等々によって、自分なりの知識を蓄積していく人も少なからず出てくるわけです（というより、むしろそれが多数派だったりします）。こういうものは、体系化すればおそらく民俗学の対象になるのではないかと思うわけです（ここに誤解があれば以下は無意味です。申し訳ありません、読み飛ばしてください）。

私自身は、音楽的才能皆無でありますので、毎年、太鼓をうまく叩けるようになるので精一杯（年々複雑化するキメというのが難物です）、自分自身でそういう知の探究に踏み込む余裕はまったくありませんでした。そこで、音楽の部分は軽々こなして、文化の部分に踏み込んでいっている仲間（師匠たち）からいろいろ話を聞いて、自分の知的好奇心を満たすというのが常でありました。

基本的には、私にとっては、そのような仕方での知的好奇心の満たし方というのが必要十分だったのですが、時たま困ったことが起きていました。同じ事象についての理解が、師匠によってかなり違うということが、ときどきあったわけです。そういうときにいつも思っていたことというのが、「知のフォーラム」があればいいのになあということでした。すなわち、それぞれの師匠が見てきた、聞いてきた、経験してきたことを、知的誠実という姿勢のもとで披瀝しあい、意見を言い合い、批判しあうという場があれば、理解の違いが、誰かの誤解なのか、視点の違いなのか、あるいは実は別のものを見ていたのか等々のことがわかる可能性が高いのだけどなあと思っていたのでした。

私は、大学は、本来そのような「場」であるべきだし、成城大学は事実そのような「場」であると思っています。そこに民俗学研究所があるということは、民俗学にとって、あるいは世の中の人みんなにとって大変に有意義なことであると思っています。研究所の益々の発展を祈り上げる所以です。　（運営委員）

研究所活動報告

◇新規プロジェクト紹介◇

令和６年度 研究プロジェクト

「中国における考古学研究の現状と課題」

研究代表者　小澤 正人

中国における近代的な考古学研究は 20 世紀初頭に始まり、殷墟遺跡の調査などで大きな成果をあげた。しかし日中戦争が始まったことにより、調査や研究は中断を余儀なくされる。戦争の終結により研究は再開されるが、間もなく国共内戦が始まり、その結果中華人民共和国が成立すると、考古学者は大陸と台湾に分かれてしまう。中華人民共和国では中国科学院に考古研究所が設立され、同時に北京大学に考古学コースが設けられるなどして、研究者の養成と調査研究が進められた。その結果 1950 年代から 60 年代にかけ中国各地で調査が進み、考古学研究の空白が埋められていった。しかし 1966 年に文化大革命が始まると、再び考古学研究は中断されてしまう。その再開は 1972 年の文化大革命の終結を待たなければならなかった。

このように中国の考古学研究は、20 世紀の中国現代史の影響を大きく受け、紆余曲折を辿った。文化大革命が終了し社会が安定するなかで、考古学研究も着実に成果を蓄積し、20 世紀末までに全国的な体系が確立されることになった。

21 世紀に入ると、中国の経済発展とともに発掘調査が爆発的に増え、大きな発見が毎年のように続くようになった。同時に考古学に対する関心も高まり、考古学コースを設置する大学が増え、各省に研究所も整備され、研究の蓄積が進んだ。さらに化学分析が普及したことで、研究の分野も広がった。その結果、現在の考古学研究では、20 世紀に構築された枠組みの再検討が求められるようになってきている。しかし発掘調査や研究がこれまでになく増加したことで、個人で考古学研究の全体像を把握することが難しくなってしまっている。

本研究は上記のような認識に基づき、近年の中国における考古学研究を総括し、その到達点を明確化することにより、今後の中国考古学研究の方向性を明らかにすることを目的とするものである。

具体的には、研究メンバーにより、中国における各時代・テーマにおける考古学研究の現状と課題を明らかにし、それぞれの成果をまとめ、総括することで、上記の目的を果たしたいと考えている。参加メンバーと検討する分野は以下の通りである。

新石器時代：今村佳子・徳留大輔
殷周時代：大日方一郎（殷・西周）・小澤正人（春秋戦国時代）
秦漢時代：上野祥史
魏晋南北朝時代：熊坂聡美

研究は個別研究とともに定期的に研究会を開催して、意見交換をしながら、進めて行く予定である。

（小澤正人）

研究所刊行物

『民俗学研究所紀要』第 48 集　令和 6 年 3 月 25 日発行　A5 判 160 頁

＜収録内容＞

・生活のムラと支配の村―近世村落の民俗学―　福田 アジオ
・送る人形、立てる人形 ―その地域的展開―　松崎 憲三
・「嘉永文化」の一様相 ―異形植物に関する風聞流布をめぐって―　小沢 詠美子
・新京工業大学の戦後同窓会における集合的記憶 ―日中の同窓会資料を素材として―　韓 美怡
・柳田國男の著作と著述―書物の寄贈に寄せて―　田中 正明

豆手帖

鳥人小史

成城大学非常勤講師 今 野　大 輔

1915 年、「恵美号」と名付けられた飛行機が空を飛んだ。この飛行機はエンジンこそ中古の外国製であったが、機体は国産であり、なおかつその製作者は軍人ではなく民間人であった。ライト兄弟が初飛行を遂げてから 12 年。すでに日本国内でも民間人による飛行機の製作と飛行が実施されていたのである。恵美号の「恵美」の名は、支援者たちの美しい恵と、製作者の生まれた大阪の恵美須町から付けられたものである。その製作者は伊藤音次郎といい、日本における民間航空のパイオニアと目されている人物である。

1891 年生まれの音次郎は少年期に活動写真で見たライト兄弟の飛行機にあこがれ、国産飛行機の製作に挑戦していた奈良原三次のもとで飛行機の操縦技術と製作を学んだ。後に千葉県の稲毛海岸に自身の伊藤飛行機研究所を開設し、パイロットや技術者を多数輩出している。冒頭の恵美号もそこで作られ、1916 年の東京上空への飛行をはじめ、各地への巡回飛行の際に用いられた。珍しい飛行機の姿に各地の人びとは熱狂したようである。

その音次郎は少年期から最晩年まで継続的に日記を書いており、36 冊が千葉市に寄贈されている。『伊藤音次郎日記』は日本の民間航空史の貴重な史料であるが、その評価はおおむね彼の戦前の業績に向けられている。事実、音次郎が飛行機製作所を運営して後進の育成を進めていたのは戦前までである。なぜなら、終戦とともに日本の航空産業はGHQによって禁止されたからである。

戦後、音次郎はそれまで住んでいた津田沼を離れ、家族・従業員をともなって成田市の東峰へ移住した。飛行機の製作者ではなく、開拓農民のひとりとして北総台地の開墾に従事することになったのである。断片的に残されている戦後の『伊藤音次郎日記』にも、ひとりの老農夫としての日々が記されている。とはいえ、音次郎は完全に航空界との関係を失ったわけではなく、主権回復とともに再開した航空産業に再び就いたかつての知人との交友も続き、また航空界の古老として取材を受けることもあった。そのような音次郎の身辺に思わぬ事態が出来する。新空港の建設計画である。最終的な建設予定地は、まさに音次郎の住居と重なった。

新空港建設は現在にも尾を引く強烈な反対運動を引き起こした。音次郎は空港建設候補地となった周辺自治体を自転車でまわり、その日記に住民による賛否の傾向を書き残している。音次郎本人にとって新空港建設は日本の航空界発展にとって歓迎すべき事業であり、本人も近隣住民にその必要性を直接訴える機会も設けていた。また、かつての従業員を新空港内の事業にあっせんするなど、建設予定地住民の中でも徹底した賛成派であった。その顕著な行動は、20 年にわたって開墾を続けた土地を最も早く提供したことである。1967 年の年賀状に添えた「敗戦で竹やぶ拓いた吾が畑　お役にたって空港となる　民間機初めて飛んで半世紀　そこに空港迎えて意義あり」の二句にも新空港への期待が表れている。

音次郎は東峰の土地に、飛行中の事故で死んだ教え子や民間航空の発展に寄与した人びとの魂を祀る航空神社を自ら建立して津田沼から遷座し、彼らの冥福を祈り続けた。この神社は現在も名を変えて東峰の地に鎮まっている。新橋駅の近くには別の航空神社があり、「落ちない」ことから受験などの合格祈願に訪れる人が増えているという。今や飛行機は「落ちない」象徴となった。音次郎たちが稲毛の海岸を飛んでいた大正時代には、「飛行機石鹸」なるものが売られていたという。その由来は「よく落ちる」ことからである。落ちるものから落ちないものへ。飛行機や航空産業の発展は大企業や軍隊だけによるのではなく、その陰には音次郎のような民間人も数多くいたのである。　（研究員）

◇公開講演会開催報告　令和６年６月１５日

岩本通弥　氏

「日常学としての民俗学」の提唱―柳田國男『世相篇』をどう読むか

「日常学としての民俗学」を提唱されてきた岩本通弥東京大学名誉教授をお迎えして標記公開講演会を開催いたしました。講演は「自己紹介」をとおして民俗学の成りたちと多面性について紹介していくという流れで始まりました。精緻な学史検討を研究の基点にされてきた先生の学風が聴講者のなかで共有されていくことになりました。

次いで、1931 年に刊行された『明治大正史世相篇』を分析した詳細な解説が行われました。柳田自身が「自序」において「じつはこういうふうな書物を一度は書いてみたいということが、内々の自分の願いであった」と述べながらも、自身で「フオクロアとしては失敗」と評価した事由が解き明かされていくことになりました。

柳田の年譜で確認していくと、同書は柳田が農商務省農務局・法制局参事官・内閣書記官記録課長・貴族院書記官長の経験を経て、朝日新聞社での 10 年間の勤務後に刊行されています。そして、1933 年には自宅で民間伝承論の連続講義が開始され、1935 年に「民間伝承の会」が設立され民俗学的な研究が急速に展開されていったことが確認できます。こうした流れのなかで同書の「自序」の記述内容を捉え直していくことが示唆されていくことになりました。

柳田の民俗学的研究の起点とされる『後狩詞記』(1909)『遠野物語』(1910) を、経済史学を学問的基礎のおいた農政官僚が平地民と異なる生産活動に従事している山間地の人びとの日常生活の成りたちを示す記録として作成したものと捉えなおすと、『明治大正史世相篇』で試みた全国の新聞記事の分析による世相分析は、対象を全国に拡げ、当時の日常生活の解明を試行したものではなかったと捉えなおすことができます。同書を刊行したことが柳田の思索を深めていくうえでの結節点となったのではないかということを再確認させていただいた講演会となりました。　（小島孝夫）

～夏期業務期間中の開室日のお知らせ～

8月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

9月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

8月1日～9月11日の間は、夏期業務期間となります。

が開室日

が閉室日です。

期間中の開室時間：

9：00～16：00

（12：30～13：30は閉室）

9月12日以降は通常の開室となります。

※来室時には事前にお問い合わせください。

◇人事

・所員：陳力衛 経済学部教授（令和６年６月１日発令　新任，日中言語交渉史 日本語史）

・所員：福田宏 法学部教授（令和６年６月１日発令　新任，国際関係論 中央ヨーロッパ諸国の政治）

編集後記

民研ニュース 145 号をお送りします。巻頭言には川淳一法学部長から「成城大学に民研があるということ」との題名でご寄稿をいただきました。川先生ご自身の「浅草サンバカーニバル」での体験と関連づけて、大学に民俗学研究所があることの意義についてお考えを述べていただきました。研究活動報告では、小澤が代表となっている「中国における考古学研究の現状と課題」を紹介しました。このプロジェクトでは、近年発展が著しい中国考古学の現状と課題を検討したいと思っています。「豆手帖」では今野大輔研究員から「鳥人小史」との題名で民間航空のパイオニアである伊藤音次郎を紹介していただきました。本年度の公開講演会では岩本通弥氏から「日常学としての民俗学』の提唱―柳田國男『世相篇』をどう読むか」との題名でご講演をいただきました。今年の夏も酷暑が予想されています。是非ご自愛ください。

民俗学研究所ニュース　Ｎｏ．１４５

令和６年７月18日発行

編集兼発行人：成城大学民俗学研究所主事　小澤　正人

〒157-8511　東京都世田谷区成城6-1-20

TEL：03-3482-9097・9098　FAX：03-3482-7763

mail：minken@seijo.ac.jp